

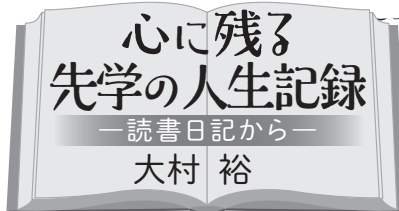
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.183
2018.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第7回

山田野理夫『歴史家 喜田貞吉』(宝文館出版 1976年)と 喜田貞吉『六十年の回顧』(『喜田貞吉著作集』第14巻 平凡社 1982年所載)

前者は800数十ページの伝記である(以下「伝記」とする)。メリハリのない淡々とした筆致で喜田の生涯を描く。克明な記録は一体何を典拠としたのであろうか。喜田の内弟子の山本栞蔵が死の直前に3冊の喜田に関するノートを山田に提供しているのが基本史料となったか。喜田自身の手になる後者(以下「自伝」とする)よりはるかに内容が豊富で、彼の生誕から死去まで(1871~1939年)を克明に記載している点で、学史の史料として貴重である。一方、読み物としては「自伝」の方が断然面白い。喜田博士の喜びや苦悩が率直に語られていて、読者を飽きさせない。ただ、生誕から文部官僚時代までが詳細で、研究活動が高揚する京都帝大講師・教授時代・東北帝大講師時代の回顧が簡略に流れてしまっている点が残念である。「南北朝正閏論」に関わる事件(教科書編修官であった喜田の、南北朝を対等に認めた国定教科書等の記述に対する右翼・野党・世論の攻撃・紛糾)には、かなりの頁を割いている。この事件において受けた喜田の心の傷が大きかった故であろう。

喜田は徳島の山村の農家の末子。両親と長子宇吉の努力で以前失った田畑を取戻し、その財力を以て貞吉は上級学校に進学する。この進学には、小学校教師の「樋口健三先生」の大変な尽力があったという。「自伝」では「樋口先生」について詳細に記しているが、草深い田舎にこんなに素晴らしい教養人・人格者がいたことに驚嘆した次第である。喜田の人格形成にこの人物が及ぼした影響は多大であったと思われる。樋口は、医師でありながら村の子供たちのために43年間教育活動にあたり、傍ら日曜ごとに医学の最新知識を得るべく、師を求めて四里の道を歩いて徳島に通っていたという。平日の夕食後は往診に出かけ、診察代は、それが心からの謝礼ならば大根一把でも満足されるというお方であった。

さて、最初徳島中に進学するも、その特異な風貌(後述)と「郷中物」(田舎者)の故を以て町場の同級生のからかいの対象となり、嫌気がさして中退。第三高等中学校に入学する。ここの入試では英語が28点であったが、他の受験生が苦手の数学で満点を取ったことに教師たちが注目。条件付きで入学を許される。しかし、数学担当の教師の点呼の際、「ヘイ」(徳島弁では丁寧語)と答えたのがきっかけで、その教師と反目。結局その教師の講義を受け続けるのが苦痛となって、数学で身を立てるのを断念する。大学の学部選びは語学の授業が少ない国史学科のある文学部とし、東京帝国大学に進学する。東北帝大の数学教師となった林鶴一は、後年、「本当なら僕の地位に君が立っているべきであった」と言ったという。

「鼻ペチャ」で、手足が異常に短い(「自伝」)特異な風貌に「ヘンコツ」な性格が災いして、徳島中学時代に受けた侮辱や差別の体験は、謂れない差別に激しく反発する姿勢を育んだものと思われる。被差別部落の人々との交流、差別解消のための文筆・講演活動、アイヌの人々に対す

る深い同情(それは気持ちだけでなく、不心得者に騙されて神戸までやってきた十数人のアイヌの人たちが困窮しているのを知ると、宿泊場所の確保や食事の手配・帰りの汽車賃の掻き集めを、仕事を放り投げてやっていたと「伝記」にある)等、帝国大学卒・文部官僚・京都帝大教授歴任の輝かしい履歴を感じさせない水平の目線を持った温かみを感じさせる。考古学では山内清明に「ミネルヴァ論争」(縄紋式終末年代に関する「ミネルヴァ」誌上での論争:1936年)において完膚なきまでにやり込められ、「引き立て役」の立場を演じた喜田ではあるが、それでもなお、同時代の考古学研究者たちが深い尊敬の念を表明している(三森定男・斎藤忠・乙益重隆など)理由がようやく理解出来た次第である。

これは余談であるが、山内との論争が続いていた頃、学会の休憩時間に山内や彼を慕う学生たちのテーブルに、喜田博士が同席したことがあったという。お二人は実に和気藹々と談笑していたとのことであるが、コーヒーの勘定は喜田博士が持ったとのことである。この事を我が師・稲生典太郎先生が同僚の喜田新六(喜田博士の次男)に語ったところ、「それは稀有のことである」と折紙を付けられたとか。論争相手の山内に対する格別の好意を感じるのであるが、「けちんぼ」という印象を与えかねないエピソードである。しかし喜田博士の金銭感覚は合理的なだけである。梅原末治が若い頃、宿を失って途方に暮れていたとき、懇意にしていた寺院に掛け合って宿舎を無償で確保してあげただけでなく、「小川先生」と共同で各々毎月5円ずつ拋出し、生活を助けてくれたというのである(梅原末治『考古学六十年』平凡社 1973年)。ちなみに喜田と梅原は親子ほども歳が違うが、喜田は梅原を「考古学ではわが師」と見做していたという(「伝記」)。謙虚な人柄に尊敬の念を深くする。

学問的には、関心が生まれた研究対象に対して貪欲にくらいつき、次々に文章化して行くタイプで、生涯に千三百余の論文・雑録を執筆している(但し、単行本はあまり残していない。誤りがあった場合、読者にその旨を伝えることが単行本では困難なためであると「自伝」に記している)。彼は、史学・民俗学・考古学・歴史地理学など、文系の多くの分野に手を出しているが、それらは体系だった仕事とはなっておらず、喜田自身もそうした自分の性向に悩んでいる節がある。しかも誤りを認めたら訂正に躊躇しないので、他人が喜田の仕事を追跡するときには多大な困難を伴うという。論争が好きなのは彼の特徴である。ちなみに「伝記」では、関野貞・足立康・柳田國男等との論争にはかなりの頁を割いて記述しているが、「ミネルヴァ論争」には全く言及がない。喜田自身による記録がなかったということだろう。喜田と山内の間には、「私的には」「一点の蟻もなく」、その論争は「堂々としてしかも明朗、誠に敬服すべきものがあり」「稀に見るフェアプレーと云ふ可きで」あった(甲野勇評『ミネルヴァ』1巻6号、52頁)から、喜田は論文で思うところを言いつきたという思いもあったのかも知れない。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第7回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第176回) 松本周作 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第4回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「コロボックルとはだれか・中世の千島列島とアイヌ伝説」 大嶋昭海 …4

考古学の履歴書

カナダで米寿をむかえました(第4回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

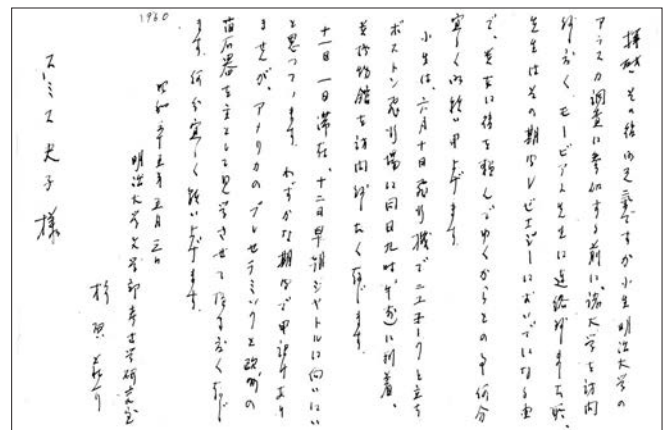
4. チャード博士の日本先史学プロジェクトと杉原壮介博士の来訪

先回述べてアジアン・パースペクティブ誌(Asian Perspectives)の第2巻第2号は旧石器特集号として1958年に出るはずだったが、いろいろの事情で実際に発行されたのは1960年の3月だった。表紙の上部には“Winter 1958”とはっきり標示されているが、下部には実際の発行年月“March 1960”と印刷されているから、芹沢長介氏と共著の論文は Serizawa and Ikawa 1958 と引用されたり、Serizawa and Ikawa 1960 と表記されたりしている。この旧石器特集号のゲスト編者をされたモヴィウス先生は私たちの論文のことを、日本の旧石器文化を包括的に扱った唯一のものだと緒言でいってくださったが、その地位は長く続かなかつた。というのは、同じ1960年の秋、アメリカ人類学会の機関紙、アメリカン・アンソロポロジストにウィスコンシン大学のチェスター・チャード博士と、当時同大学の院生だったハルミ・ベフ氏との共著論文、「日本の先石器文化」(Befu, Harumi, and Chester S. Chard. 1960. "Pre-ceramic cultures in Japan", American Anthropologist, 62:815-849.)が出たからだ。読んでみておどろいたのは、研究史からはじめて、用語の説明、遺物群の記述と編年、国外の文化および縄文文化とのとの関係を論じており、私たちの論文と構造も似ているし、国外の旧石器文化との関係に関する見解もあまり違わない。私はチャード博士に、論文を大変興味深く拝見しましたと言う旨の手紙を書き、ただし遺跡名のローマ字表記が私たちの使ったものと違っているから漢字を知らない人には混乱をきたすのではないかと(たとえば、城山を Kiyama でなく Shiroyama と書いているなど)と言い添えた。私の手紙は11月7日付、折り返し11月11日付の手紙でチャード博士は、アジアン・パースペクティブのすばらしい論文のことを知っていたら同じようなものを書くことなど計画しなかつたらうが、アジアン・パースペクティブの旧石器特集号がでたときはこちらの原稿はすでにグラブリに入っていた段階だったとのこと。遺跡名の読み方の違いについてはアメリカン・アンソロポロジストとアジアン・パースペクティブの両方に告示を出してもらいましょうということだった。

ハルミ・ベフ氏はウィスコンシン大学で博士課程修了後、1965年以降カリフォルニアのスタンフォード大学を拠点に日本の文化・社会組織の研究者として活躍されている。チャード博士はアークティック・アンソロポロジー誌(Arctic Anthropology)の創設者、1960年代から1974年に引退されるまで、ロシア、韓国、日本などの考古学者と北米の考古学者の交流に大いに貢献された。特に1960年代にはいくつかの財団から資金を得て、日本先史学プロジェクト(Japanese Prehistory Project)を発足させ、当時の新進考古学者を日本から招聘する一方、アメリカの学徒の日本考古学研究を支援した。日本から行ったのは、吉崎昌一にはじまり、岡田宏明・岡田淳子夫妻、林健作、小林達雄と続く。この方たちがウィスコンシン滞在中、またはその直後に Arctic Anthropology に発表された論文、たとえば林健作の福井洞穴の細石器を北米・北東アジアのコンテキストに置いて論じた論考(Hayashi K., 1968. "The Fukui microblade technology and its relationships in Northeast Asia and North America", Arctic Anthropology 5 (1), pp. 121-190)、小林達雄の細石刃文化論(Kobayashi, T., 1970. Microblade industries in the Japanese archipelago. Arctic Anthropology 7 (2), pp. 38-58)、そして岡田夫妻とチャード博士の共同作業による成果、北海道考古学に関する膨大な文献集に英文解説を付けた力作(Okada, A., H. Okada, and C. S. Chard. 1967. "An annotated bibliography of the archaeology of Hokkaido", Arctic Anthropology 4 (1), pp. 1-163)などは、英文で日本考古学を扱った資料の少なかつた頃だけに、特に貴

重なものだった。当時のウィスコンシン大学の院生でチャード博士指導のもとで日本の考古学に取り組んだ人々には、北海道の先石器文化を勉強して、ホロカ技法を定義したりリチャード・モーラン(Richard E. Morlan)、本州以南の先石器文化について概説をまとめたヴァルダ・モーラン(Valda Morlan)、北海道のハマナス野・八木遺跡の発掘調査をしたビル・ハーリー(William Hurley)、そして東北大学で芹沢先生のご指導を受けながら日本考古学各時代の諸問題についていくつかの論文をまとめたピーター・ブリード(Peter Bleed)などがある。

この方達のカナダにおける日本考古学研究への貢献についてはまたのちに触れさせていただくことにして、1960年代のはじめに話をもどすと、私は1959年に同じくハーヴァードの院生だったフィリップ・スミス(Philip Smith)と結婚し、1960年5月に長男ダグラスを出産した。フィリップはモヴィウス先生のアプリ・バート遺跡1958年度発掘の助手をつとめ、モヴィウスを公式指導教授としつつ旧石器研究者として有名なフランスのフランソワ・ボード(François Bordes)の指導も受けたながらフランスのソリュートレ文化について博士論文をかいていた。ダグラスが生まれたのは5月6日、産院のベッドにいた私をたずねてきたフィリップが「こんな手紙が来ているよ」と持ってきたのは杉原壮介先生からの5月3日付の書簡だった。ごらんのとおりの書面で、アラスカ調査に行く途上、ハーヴァードによって、考古資料を見学したいのでモヴィウス先生に連絡したら、フランスへ発掘に出ていて留守になるから私に頼んでおくとのこと。そのようなことは聞いてなかつたので、おどろいたし、産後間もないので飛行場にお迎えに行ったり、博物館をご案内したりするのは無理。フィリップが代理で飛行場にお迎えにいったが、見たこともない男が、「杉原先生ですか?」と声を掛けて、ボロ車にお荷物を積んだりしたので、杉原先生は心配そうなお顔つきだったとフィリップはいついていた。短い滞りだったが、ハーヴァードのピーボディ博物館の資料を見学され、私どものアパートにもきていただいで、生後1ヶ月のダグラスに会っていただいた。ダグラスにはまた3年後に帝釈峡で対面していただくことになる。



▲杉原さんからの書面

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学専攻卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部社会学専攻修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-79年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 176

恵美須ヶ鼻造船所跡 ～山口県萩市～

松本 周作

世界遺産「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」の構成資産のひとつ、恵美須ヶ鼻造船所跡は、幕末に萩(長州)藩が洋式帆船を建造した造船所跡である。遺跡は萩市中心部から北東へ約2.5キロメートルの小畑浦に位置し、近傍には史跡萩反射炉が所在する。嘉永6(1853)年のペリー来航により、欧米列強による対外的危機感を強めた江戸幕府は、これまで禁じていた大船の建造を諸藩に許した。これを受けて萩藩では、恵美須ヶ鼻造船所を開設し、2隻の洋式木造帆船を建造した。安政3(1856)年から翌4年にかけて建造された「丙辰丸(へいしんまる)」と、安政6(1859)年から万延元(1860)年にかけて建造された「庚申丸(こうしんまる)」である。「丙辰丸」の建造に当たっては、ロシアの技術を修得した船大工が招聘された一方で、「庚申丸」の建造ではオランダの技術を学んだ船大工が招かれた。この結果、同じ造船所内に異なる外国の造船術が共存する、他に類例のない遺跡となった。入庁して1年目の平成29年9月から平成30年3月にかけて、恵美須ヶ鼻造船所跡の発掘調査を担当した。これまで近世の遺跡を調査した経験に乏しい私がこの著名な遺跡を掘ってよいものかと不安でもあったが、世界遺産を調査できるまたとない幸運だと考え直し、調査に当たった。

造船所で建造された「丙辰丸」については、「丙辰丸製造沙汰控」という幕末の文献資料がいまに残っており、その内容を手かりに調査を行うことができる。これまで縄文～古墳時代の遺跡の調査に携わることの多かった私は、文字資料を参考に発掘調査を行うということがとても目新しいものを感じられた。文献資料には「丙辰丸」の造船場をはじめ絵図小屋や大工小屋など、造船所に建てられ使用された関連施設の配置や用途が記載されている。そうした情報を、実際に現地を発掘し、その規模や構造を確かめるという調査になる。このように書いてみると一見簡単そうだが、実際はとても難しい調査であった。まず、掘削する土の問題がある。恵美須ヶ鼻造船所跡は大きく分けて3地区に分けることができるが、絵図面から造船場をはじめ主要な施設が立地していると推定される地区は、埋立地である。遺跡の対岸に位置する「姥倉運河」という人工河川を開削して発生した土砂を埋め立てて出来た土地が、造船所として利用されたという経緯がある。埋め立てられた土砂は、



▲作業風景

拳大から人頭大の礫を多く含み、掘削が難しく、遺構の検出も容易ではない。また、先に建造された「丙辰丸」には造船所の絵図面が存在し、遺構の位置をおおよそ知ることができるが、「庚申丸」にはそうした資料に乏しく、その船体規模などから、造船場の規模と位置を推定し、遺構検出の作業に当たることになる。造船所として使用された敷地の範囲と「庚申丸」の規模から、その造船場が「丙辰丸」造船場を壊して造っていることが想定され、まず「庚申丸」造船場を検出することが順序として先になる。それまでの確認調査により、断片的に造船所に伴う遺構が確認されており、私が担当した平成29年度の調査では、庚申丸造船場後端部の確認が主要な目的であった。

庚申丸造船場は、地面を凹字状に深く掘り込んだ、いわゆるドック状の遺構であると推定されている。そのような巨大な掘り込みなら検出も容易にできそうなものだが、先に述べた埋立地の経緯などにより、思うように調査は進まなかった。また、大雑把に言えば、それまで私が経験してきた調査は、何らかの遺構や遺物が土の中から出てきて初めて調査が進展していくというものであった。そうした過程に慣れていたため、文献資料などの情報を基に、そこにあるはずの遺構を発掘して探し出すという調査がとても新鮮に感じられ、また困惑の種にもなった。結果として、平成29年度調査では、明確な造船場遺構は確認できなかったが、文献資料には記載のみられない遺構が検出された。円形の井戸状の石組遺構で、海浜部を埋め立てた場所で検出された。水溜施設の一種であると推定され、造船所に伴う遺構であるかどうか判然としない部分もあるが、予期せぬ遺構の出現に驚かされ、再び頭を悩ますことにもなった。

幕末期などの比較的新しい時代の遺跡における発掘調査では、参考とすべき様々な文献資料が存在するため、当時の人々の生活の様子を具体的にイメージしながら調査を進めることができる。しかしその一方で、文献の記載に囚われすぎてしまったり、実際に検出された遺構・遺物や現場の状況を純粋な目で観察することが難しくなるという現象も生じるように感じられた。恵美須ヶ鼻造船所跡の調査を通じて、文献資料と発掘資料を相互に関連させて取り扱うことの面白さや難しさ、発掘調査の多様性について改めて学ぶことができたように思う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは永瀬史人さんです。



▲史跡位置図

考古学者の書棚

「コロポックルとはだれか -中世の千島列島とアイヌ伝説」

瀬川拓郎／新典社新書(2012)

大嶋 昭海

コロポックル。一般的にはフキの葉の下にいる小人のイメージが湧くであろうし、考古学を学んだものであったら、日本人起源論争の一つであるコロポックル論争を思い出す人も多いと思う。また、人類学的テーマである沈黙交易のモデルの一つとしても例が挙げられることも多い。どちらにせよ、その実態は不確かであり、いわゆるアイヌの伝説とされる類い話である。実際にコロポックル論争以降、この伝説を学問的に対象とした例はほとんど無いようである。

そのような伝説に対して、考古学者である著者の瀬川氏は文献史学や考古学の成果を駆使して文字通りコロポックルとは誰かを明らかにし、中世アイヌ史に位置付けている。本書はわずか127ページの新書であるが、その中に学問の面白さや醍醐味が詰まっていると感じたので、ここでご紹介したい。

本書の構成は以下となっている。

- 第Ⅰ章 アイヌの小人伝説を読む
- 第Ⅱ章 伝説の変容を考える
- 第Ⅲ章 伝説の起源を考える
- 第Ⅳ章 アイヌの千島進出
- 第Ⅴ章 小人とはだれか

第Ⅰ章では、1613年～1808年までの小人伝説の紹介をおこない、採録された地域や時代によって内容にバリエーションがあることを明らかにしている。第Ⅱ章ではバリエーションを伝説の変容と捉えて検討している。例えば小人の名称は、竪穴住居に住む人(神)とフキの下に住む人(神)、千島の人を意味する名称があり、道東でのみ使われている竪穴住居に住む人(神)名称が古いとする。また、アイヌの英雄譚であるユーカラのオキクルミ伝説との融合などを指摘し、19世紀頃に新たな要素が加わったとした。

第Ⅲ章では、小人伝説の起源について、19世紀以前の古層の伝説を材料として、道東アイヌや南千島アイヌ、北千島アイヌの歴史資料や当該期の考古学的状況を元に考察している。古層の伝説の特徴としては、小人が小人島に住んでいること、島にはワシが多くいること、小人は船で本島にやってくること、目的は土鍋製作用の土(粘土)にあること、アイヌが脅かすと身を隠すこと、を挙げている。そこでまず、小人島の位置を北方におけるオオワシの飛来ルートから、北千島かカムチャッカであるとする。次に土鍋について、北海道本島(道東)では15～16世紀には土鍋製作が途絶えるが、北千島アイヌは近世末まで土鍋作りをおこなっていたとして、すでに土鍋作りをおこなっていなかった道東アイヌが北千島アイヌの土鍋を奇異なものともみた事実から生まれた伝承とする。そして、その時期は道東で土器製作が絶えた15世紀～16世紀以降、伝承の初出の17世紀後葉までの間とした。その他にも北千島アイヌに特徴的な文化(近世以降における竪穴住居の使用)や習俗(沈黙

交易)と共通する点が多く、小人が北千島アイヌであると指摘する。また、それを傍証する一つとして、小人伝説がアイヌ社会全体で知られているのに、北千島アイヌのみにその伝説が知られていなかったことを挙げている視点が面白い。

第Ⅳ章では、小人伝説の成立時期について先の土鍋製作の年代と1613年が小人伝説の初出であることから、その以前である15世紀～16世紀に絞られるとして、その時期の北千島の状況をまとめている。中世の北千島については明らかでないことが多いとしつつも、擦文時代にはほぼ無人であったことや、近世北千島アイヌの土鍋習俗が道東の14～15世紀の土鍋習俗を受け継ぐものであること、『後鑑』の記事から15世紀に北千島からラッコの毛皮の移出が始まった可能性が高いことから、15世紀に交易活動を目的としたアイヌの北千島進出があったとする。

第Ⅴ章では、小人伝説とは、ラッコ皮やオオワシ羽の入手のため、北千島へ進出したアイヌがその奇妙な習俗によって異人視され、15世紀～16世紀には道東アイヌに小人として語られるようになったことに起因すると述べ、その成立と展開についてまとめられている。そして、その伝説は本来、北千島アイヌの実態にかんする「情報」としての性格を強くもっていたが、物語性や神秘性を増していく中で、リアルな経済的事象(オオワシやラッコなどの交易品など)を削ぎ落とし、反対に奇異な習俗(竪穴住居や土鍋など)が神秘性を纏って残存していったと述べている。

以上、簡単に本書を要約したが、本書は、歴史学では扱いにくい伝説を、考古学と文献史学の成果を巧みに扱い、アイヌの歴史のなかに見事に落とし込んだ点が非常に新鮮かつ刺激的であった。本書の問いは題名のとおり、コロポックルとはだれか、という非常にシンプルなものである。しかし、その本質的な問い一つを探ることで、だんだんと当時の北方世界を取り巻く人々の生き生きとした姿が見えてくるところに本書の面白みがあると思う。そして、学問における考古学的手法の重要性和可能性も再認識させられ、考古学に関わる端くれとして、勇気付けられる書でもあった。

なお、最後に著者も述べているが、本著では沈黙交易について、なぜそのような習俗が生じることになったのかまでは明らかにされていない。しかし、これに関しては次著の『アイヌの沈黙交易』で具体性をもって明らかにされており、より世界が広がる本である。

アルカ通信 No.183

発行日 2018年12月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所 (株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp